史跡横須賀城跡 I

昭和59年度保存修理事業概報

1985

大須賀町教育委員会

史跡横須賀城跡 I

昭和59年度保存修理事業概報

1985

大須賀町教育委員会

序

昭和56年５月８日付で、横須賀城跡が「国の史跡」に指定され恒久的保存措置が示されました。

このことは、天正６年に築城され、以後徳川・武田の攻防を物語り、廃城になった明治維新までの約300年間、城下町としての歴史を誇ってきた本町にとって輝かしい評価であります。また、再三にわたり城跡保存を訴えてきた関係者にとっても大きな喜びでありました。

昭和57年度、58年度の２か年に亘り「保存管理計画」が策定され、昭和59年度においては、文化庁および県のご指導ご援助とにより城跡環境整備事業の一環として、発掘調査および樹木の伐開事業などを実施いたしました。

事業の遂行にあたりましては、大正大学名誉教授斎藤忠先生、静岡大学助教授小和田哲男先生、奈良国立文化財研究所高瀬要一先生からは種々ご指導をいただきました。さらに、県教育委員会文化課の諸先生方、また及川・山田両先生には、ご多用の中現地調査に当っていただくなど、格別なご配意をたまわりました。あらためてあつくお礼申しあげます。

この先、城跡の保存と環境整備事業を推進していくためには、国および県のご支援と土地所有者の深い理解、町民のあたたかい協力が何よりも大切であります。

本書は城跡の復元整備の上で、貴重な資料であるとともに史跡公園の完成への目標に向って活用されることを念願し、刊行の序と致します。

昭和60年３月

静岡県小笠郡大須賀町教育委員会

教育長　伊　藤　正　一　郎

例　　言

1. 本書は静岡県小笠郡大須賀町に所在する史跡横須賀城跡の昭和59年度保存修理事業の概報である。
2. 保存修理事業は文化庁・静岡県の補助・指導をうけて、大須賀町教育委員会が実施した。
3. 保存修理事業に伴う発掘調査は、斎藤忠（大正大学名誉教授）・小和田哲男（静岡大学助教授）・高瀬要一（奈良国立文化財研究所）の指導のもと、静岡県教育委員会文化課の及川司・山田元広の両名が担当した。調査に関する事務は大須賀町教育委員会事務局があたった。
4. 本書の執筆分担は以下の通りである。

   第Ⅰ章　松　本　すが子　　第Ⅱ章　及　川　　司　　第Ⅲ章　斎　藤　　忠
5. 発掘調査資料の整理には、県教育委員会文化課清水整理保管室の鈴木清子・杉田充恵・秋山よしのの協力を得た。なお、本書の編集は及川が行なった。

史跡横須賀城跡 I

昭和59年度保存修理事業概報

目　　次

序

例　言

第 I 章　横須賀城跡の保存事業 …… 1

1. 保存管理計画の策定 …… 1

2. 昭和59年度の事業概要 …… 1

第 II 章　発掘調査の概要 …… 4

1. 調査の目的と経過 …… 4

2. 遺構について …… 7

3. 遺物について …… 12

第 III 章　ま と め …… 17

挿　図　目　次

第 1 図　横須賀城跡測量基準点設定図 …… 2

第 2 図　横須賀城跡本丸・西の丸部分地形および調査区設定図 …… 5

第 3 図　本丸西側部分調査区平面図 …… 7

第 4 図　本丸西側部分土層図 …… 8

第 5 図　本丸北側土塁トレンチ実測図 …… 9

第 6 図　本丸北側土塁前瓦溜実測図 …… 10

第 7 図　天守台トレンチ実測図 …… 11

第 8 図　出土遺物図(1) …… 13

第 9 図　出土遺物図(2) …… 14

第 10 図　出土遺物図(3) …… 15

挿　表　目　次

第 1 表　横須賀城跡測量基準点測量成果表 …… 3

図　版　目　次

図　版　1　　1.　横須賀城跡遠景（南より）
　　2.　本丸部分調査前風景（東より）
図　版　2　　1.　本丸西側部分発掘区全景
　　2.　本丸西側部分土層堆積状況(1)
図　版　3　　1.　本丸西側部分土層堆積状況(2)
　　2.　本丸西側部分サブトレンチ瓦出土状況
図　版　4　　1.　本丸北側土塁トレンチ
　　2.　本丸北側土塁断面
図　版　5　　1.　本丸北側土塁前瓦溜め全景
　　2.　同瓦堆積状況
図　版　6　　1.　本丸北側土塁前瓦溜め（部分）(1)
　　2.　本丸北側土塁前瓦溜め（部分）(2)
　　3.　天守台トレンチ瓦溜め
図　版　7　　1.　天守台トレンチ
　　2.　天守台トレンチ内集石
図　版　8　　1.　作業風景（調査区下草刈り）
　　2.　作業風景（トレンチ掘り下げ）
　　3.　作業風景（瓦溜め精査）
図　版　9　　出　土　遺　物　(1)
図　版　10　　出　土　遺　物　(2)
図　版　11　　出　土　遺　物　(3)
図　版　12　　出　土　遺　物　(4)

第Ⅰ章　横須賀城跡の保存事業

1.　保存管理計画の策定

横須賀城跡の指定総面積は168,419.64㎡でそのうち農地は全体の53％、宅地等は約36％である。また、民有地は全体の81％を占め、その中には、松尾町の民家62戸と操業中の中小工場とが含まれている。そのため史跡の恒久的な保存を図ることを目的とした規制と、地域住民の生産活動や日常生活から生じる現状変更との調和は重要な課題である。

昭和57年度と58年度の２か年に亘り、文化庁および県の補助と指導により「横須賀城跡保存管理計画」が策定された。すなわち、横須賀城跡の歴史と現況にもとづき、指定地全域をＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区の３種に区分し、それぞれの地区の性格を明確にしたうえで、土地の利用や現状変更の規制の内容等を「保存管理基準」として明らかにしたものである。(昭和59年３月刊『史跡横須賀城跡保存管理計画策定報告書』参照)

また、史跡の保存のために土地の公有化は最も有効なてだてである。城跡の保存と地域開発との調整が行なわれてきた過程の中から、緊急かつ重要な地域を第一次公有化計画地としてあげている。

なお、「整備活用計画」については、堀・石垣・土塁・塀・門など城としての機能や各曲輪の配置等は、できるだけ復元整備したいとの基本的考え方にふれた内容のものである。

2.　昭和59年度の事業

整備基本計画の作成

横須賀城跡は、明治維新に廃城となり民間に払い下げられて以来100余年の間に、農地、住宅地、工場用地等の土地利用がすすめられ、現在ではだいぶ荒廃している部分が多い。

整備のためには、本来、城の地割がどうであったのかを把握することが肝要であるが、横須賀城跡の発掘調査は始まったばかりである。しかし、現存の遺構調査、文献・古絵図の収集と調査、航空写真の入手や検討等を丹念に行えば、かなりの部分は復元可能であるとされている。

こうした調査および資料検討と城跡の理解にふさわしい修景等とについて、奈良国立文化財研究所のご指導、ご協力をいただき「基本計画」を町単独事業としてまとめている。

横須賀城跡整備委員会の設立

横須賀城跡の第一次公有化計画地域は、本丸の丘陵地32,694.38㎡で昭和57年度より年次計画により買い上げを行ない、昭和59年度では25,161.32㎡と第一次計画地面積の76.9％に達した。

公有化計画は、城跡保存のためであることは言うまでもないが、一方史跡が正しく理解され、住民の日常的な利用にも、広く活用されるように整備し公開していくことも急がれる状況下にある。

このため「整備の基本計画」をふまえ、かつ具体的な整備計画を立案し、発掘調査についても指導をお願いするという趣旨により、昭和59年11月より「規約」を定め整備委員会を発足させた。

委嘱した委員はつぎの通りである。

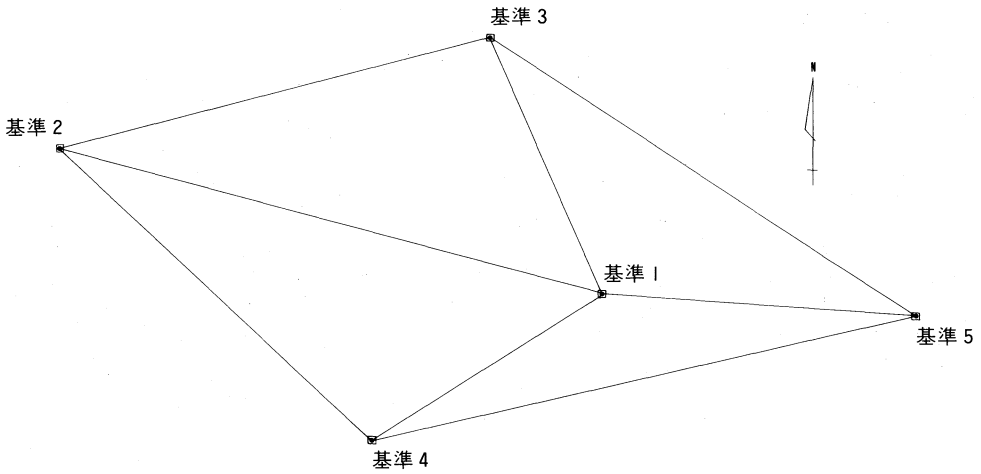
委員長　斎藤　忠　（大正大学名誉教授）
委　員　小和田哲男　（静岡大学助教授）
委　員　高瀬要一（奈良国立文化財研究所）
地元委員　大石六明・平松庄作・戸塚康雄
土屋廣重・泉敬常・松浦源一
（横須賀城跡保存推進委員会より代表）

測量基準点設置と地形測量

横須賀城跡の整備のうち、第一次の公有化計画地域は、発掘調査を前提とし、事実に基づき忠実な復元整備が計画されている。発掘調査は経費や調査体制などの点からも、早期に完了するというわけにはいかないので、調査実施後に予定されている整備については、数年次に亘ることも止むを得ない状況である。

部分的に実施していく調査や整備は、常に「整備基本計画」にそって一貫性をもち、連続した作業の一部でなくてはならない。

昭和59年度においては、指定地に5箇所の測量基準点を設置し、発掘調査や整備の実施設計に役立てるとともに、第一次整備地域の縦・横断面を作成した。



第1図　横須賀城跡測量基準点設定図

第1表　横須賀城跡測量基準点測量成果表

	L	X	Y	H
基　準　1		－146068.571	－48118.287	19.415
	373.284			
基　準　2		－145971.811	－48478.812	5.017
	295.380			
基　準　3		－145896.556	－48193.179	5.031
基　準　4		－146167.067	－48271.173	3.631
	181.867			
基　準　1				
	209.822			
基　準　5		－146084.142	－47909.043	5.864

松尾山の伐開事業

松尾山頂には、古絵図によると、水をたたえた池があり、登山路らしき跡も描かれている。しかし、現況は樹木が生い茂り、容易に山中へ入いれないほどであるため、主要な高樹を残して伐開し、下枝を整理するなど、見通しのよい疎林状態にするための事業を実施した。その結果、急峻な斜面下の空堀の遺構などが明らかになったが、池のひろがりの確認、通路の整備、また修景的な樹木の植栽等は、昭和60年度以降の事業に計画されることになった。

発掘調査

発掘調査は次年度以降の復元整備の事業に備えて実施されたもので、年次ごとに計画されていくが、本年度は最初の年であり、その概要は第Ⅱ章で述べられている。

横須賀城廃城に際し、城内の建物のほか、石垣や立木までも払い下げられた記録があり、復元整備の手懸りは乏しく、今後の調査によって、往時の登城口、通路、門、建物の位置などが確認できればと大きな期待を寄せているものである。

第Ⅱ章　発掘調査の概要

1.　調査の目的と経過

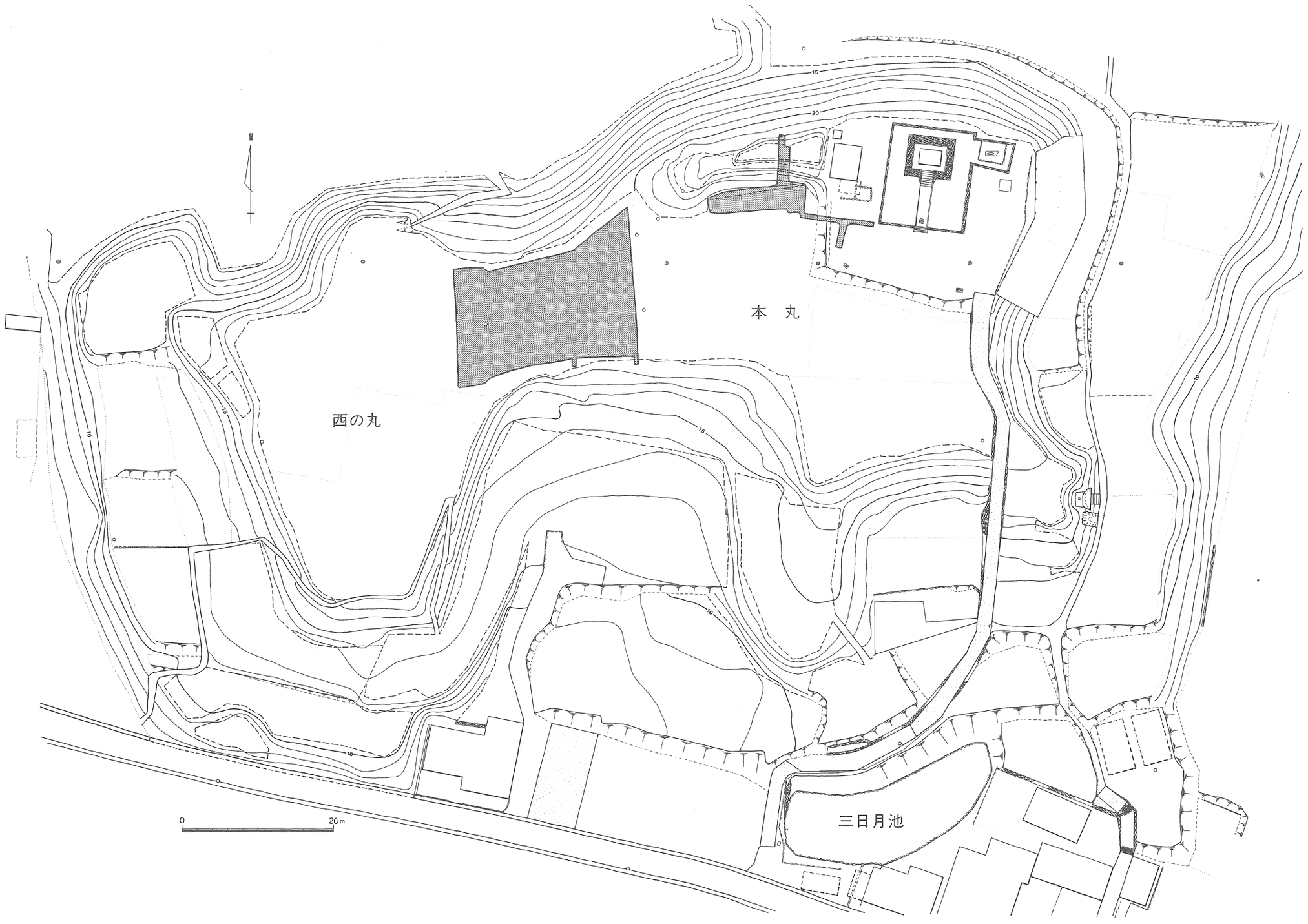
昭和57・58年度に史跡横須賀城跡の保存管理計画の策定事業を行ない、今後の保存の方針を明らかにし、本年度より保存修理事業を開始することとなった。事業の中で、今後の保存整備の基礎資料を得るために、発掘調査を実施し、遺構の残存状況等を確認することとした。本年度は第一次公有化地域内のすでに公有化の済んでいる所の中で、斎藤先生・高瀬先生の指導のもとで県文化課と町教育委員会の担当者が協議した結果、以下を調査目的とすることとした。

1.　本丸西側部分の遺構残存状況。
2.　本丸北側の土塁の構造と残存状況。
3.　天守台の構造と残存状況。

調査については町教委には専門職員がいないため、県文化課に派遣を依頼、二名の派遣をうけることとなった。調査体制は以下の通りである。

調査主体　　大須賀町教育委員会
調査指導　　斎藤　忠・小和田哲男・高瀬要一
調 査 員　　及川　司・山田元広（県文化課）
調査事務　　大須賀町教育委員会事務局

調査は８月23日～25日に調査区域の下草刈りを行ない、８月27日には斎藤先生・町教育長を始め関係者が集まり、調査の安全を祈って鍬入式を行なった。その後、本丸西側部分に発掘区を設定、便宜上４分割し、その北西部分より掘り下げを開始した。猛暑の中、茶の木の根を抜きながらの作業は大変なものであった。本丸西側部分の調査と併行して、９月３日には本丸北側の土塁、同５日には天守台西側にトレンチを設定、掘り下げを開始した。本丸西側部分については、表土除去後、精査を行なったが、新しい時期のものと考えられる溝状遺構の他、城に関連する遺構は検出されず、念のため南北に２本、東西に１本サブトレンチを入れ、土層観察を行なった。その結果、一部には瓦片が入り込んでおり、整地層の存在が考えられた。また、西側に拡張区を設けて、掘り下げたが、新しい時期の地境の溝と考えられるものが検出されたにすぎない。土塁部分のトレンチでは、その前部分に瓦溜めが検出され、その状況をつかむため、一部拡張して掘り下げた。９月11日より、各トレンチの土層の検討・線引を開始し、併せて、測量用の仮基準杭を設定した。13日からは土層実測を開始した。20日には、斎藤先生・小和田先生が現地を訪れ、調査の今後について次の事項を指導された。１.　天守台トレンチ内の石列の追求。２.　土塁の土層の再検討。３.　土塁前瓦溜めの範囲の確認。の３点である。天守台トレンチについてはサブトレンチを設定、掘り下げた結果、建物の基礎かと考えられる集石の一部が検出された。土塁の土層については検討した結果、二時期に構築されたのではないかと考えられた。瓦溜についてはその範囲



第 2 図　横須賀城跡本丸・西の丸部分地形および調査区設定図

がほぼつかめるまで大きく拡張した。

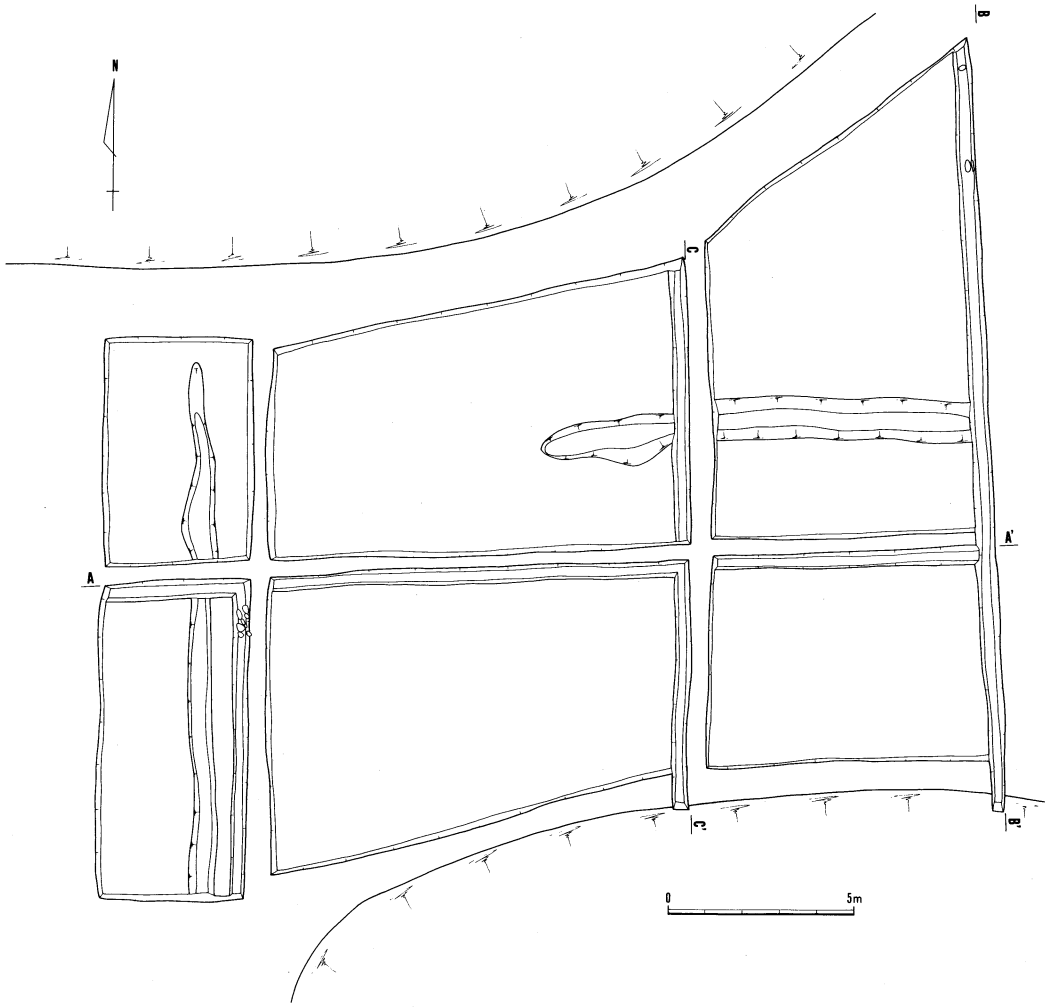
その後、実測・写真撮影等の作業を続行、10月5日には調査を完了することができた。なお、埋め戻しについては、町教委の担当者の立合いのもと、調査終了後行なわれた。

2. 遺構について

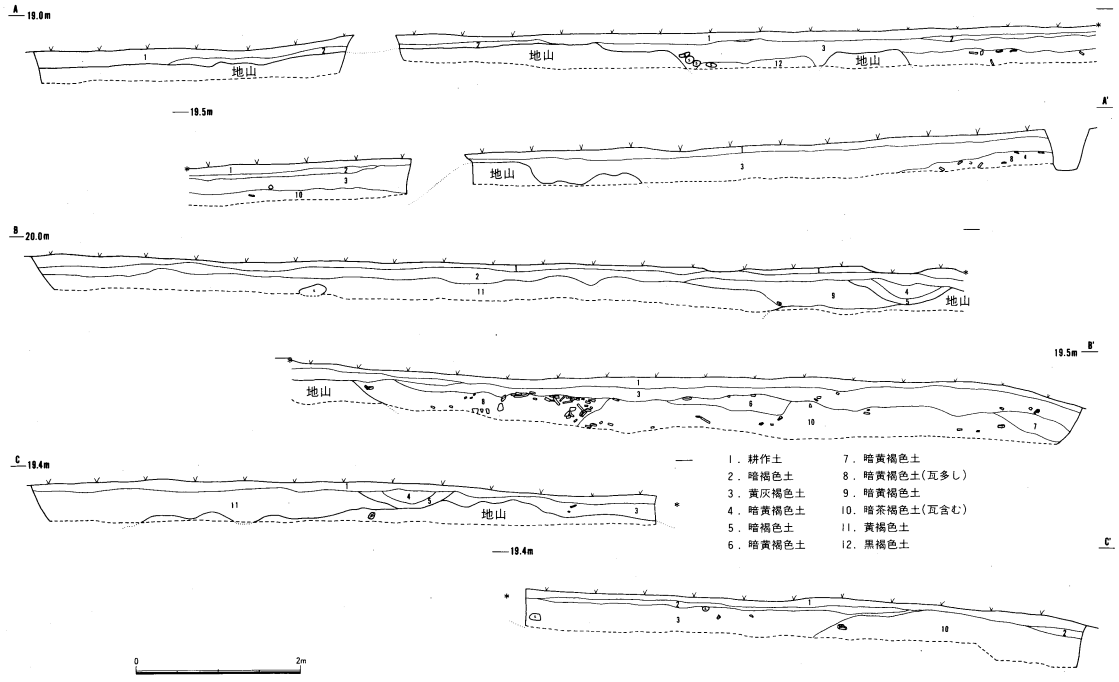
今年度の発掘調査は、本丸西側部分、本丸北側土塁及び天守台の一部を対象として行なったが、以下その概要を各部分ごとに述べる。

本丸西側部分

古絵図によれば、本丸正面の門から登ってきた口が西の丸寄りの所と東寄りの所にある。また、この本丸の西の丸寄りの所には建物が描かれている。調査はこの部分にどんな遺構が残されてい



第3図　本丸西側部分調査区平面図

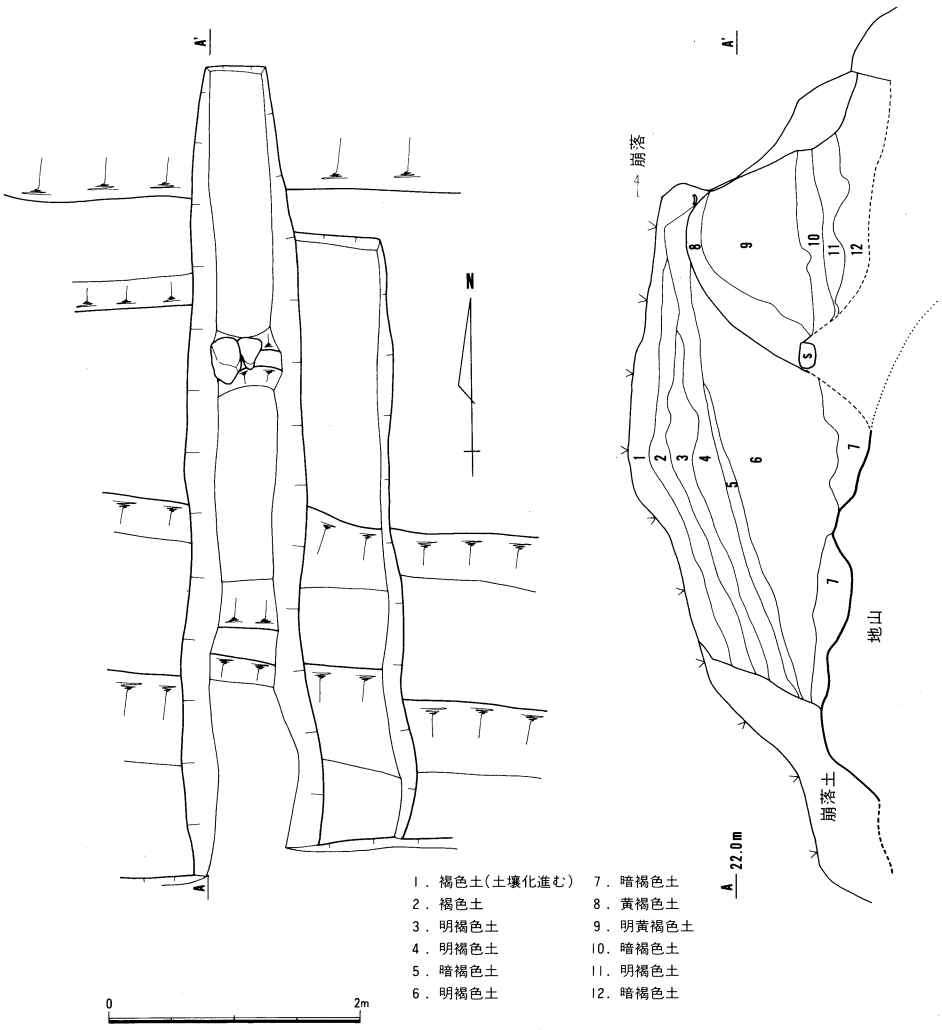


第4図　本丸西側部分土層図

るのか、またその残存状況はどうかの確認を目的として行なった。調査は田の字型の発掘区を設定、掘り下げたが、耕作土下には新しい時期の溝状遺構の他、何らかの遺構も検出されなかった。そのため、南北2本、東西1本のサブトレンチを入れて、土層観察をするとともに一部西側に拡張区を設定し、掘り下げた。拡張区では後世の地境の溝状遺構が検出されたのみで、城に関連するものは検出されなかった。サブトレンチの掘り下げの結果、発掘区の南半、地形に沿う形で、瓦の混った整地層と考えられる層が検出された。中に入いっている瓦には「櫛松」の文様の軒丸瓦もあり、これを整地と考えれば、西尾氏が城主であった時代のものと考えられる。この部分のもとの地形を推測すると南北から弯入する形でややせばまっており、本丸と西の丸の通路的部分であり、建物等は本来建てられていなかったと考えられる。また、ある時期、南側に整地し、その空間をやや広くしたと考えられるが、やはり建物等は建てられなかったものと考えられる。この部分の性格については周辺の調査が進む中で検討をしていく必要があろう。

本丸北側土塁

今回の調査の目的の一つに土塁の構造の解明があった。そこで、この土塁にトレンチを設定、掘り下げ、その断面を観察検討した。その結果、土塁は、2時期にわたって構築されていることが明らかになった。1期の土塁は、北側部分がやや崩落しているが、基部の幅約3m、高さは当時の城の面と考えられる所から約2mである。地山である礫混りの暗褐色ないし明褐色土を積み上げている。2期の土塁はこの1期の土塁の南側に構築している。基部の幅約6m、高さは約2.4

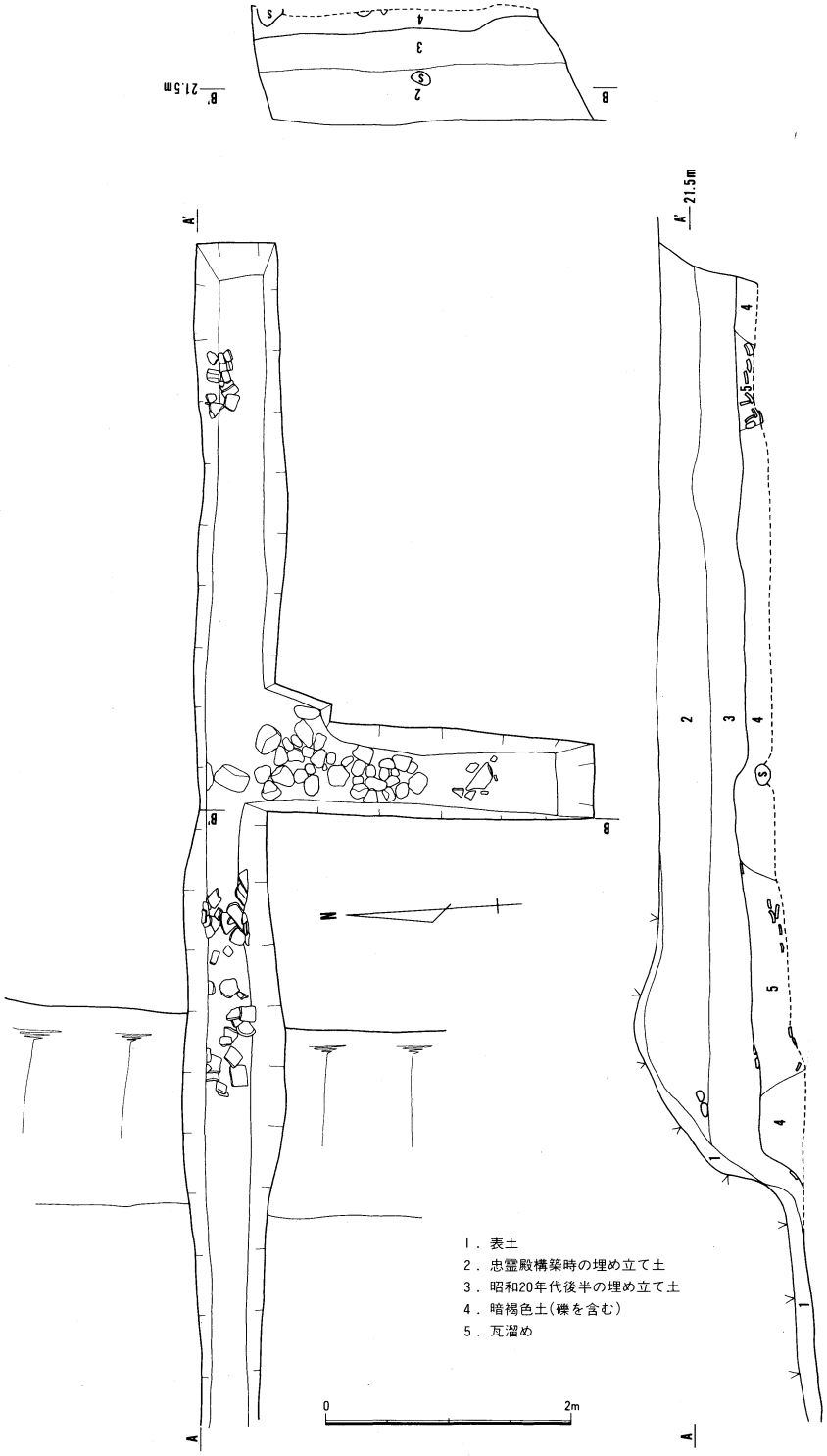


第5図　本丸北側土塁トレンチ実測図

m程である。その土層をみると、上部にはきれいな版築の様子がうかがえる。この土塁には何らかの上部構造があったか、それを知る痕跡は何も確認されなかった。

この土塁の前面からは瓦溜が検出された。瓦は土塁に寄せられた形で検出され、幅1.5m～3m、東西に長く広がっている。この瓦の堆積状況をみると、当時の面にそのままのっており、廃城時、こわれた瓦をこの土塁の前に寄せたものと考えられる。廃城時の記録をみると、建物はいうに及ばず立木、石垣までも払い下げられており、瓦もその中にふくまれていたであろう。まともな瓦は当然持ち出されており、ここにはこわれた瓦が棄てられたと考えられる。この瓦溜めには完形のものが極く少ない点から肯首できる。また、こうした瓦溜めの存在をみると、瓦葺きの建物があった事は確実であり、この瓦溜めの南側に位置する可能性は高い。次年次以降の調査で明らかにされるであろう。

第 6 図　本丸北側土塁前瓦溜実測図



第7図　天守台トレンチ実測図

天守台

現在、本丸の北東部分に１段高くなった部分があり、天守台と通称されている。しかしながら、本来の形であるとは考えられず、戦後、２度程大きく改変されている。調査は本来の天守台の位置・規模の解明を目的としたが、現状の建物等の関係から、その西側の一部に一本トレンチを入れたにとどまった。トレンチによる調査の結果、地元の人の話を裏付ける様に、忠霊殿建設の際、北側の土塁の一部をとり崩して造成した層と、また、昭和20年代後半、子供たちの遊び場とするため、天守台をとり崩して造成した層が認められた。本来的、天守台の遺構は認められず、天守台は現在天守台と言われている部分の北東寄りに位置するものと考えられた。また、前記の２つの造成土の下には城当時のものと考えられる面が認められ、小規模な瓦溜めが検出されるとともに一部集石が認められた。トレンチ調査であるため、その全容ははっきりとはしないが、あるいは、本丸にあった建物の基礎ではないかと考えられる。

3. 遺物について

本年度の発掘調査で出土した遺物には、瓦・陶磁器・鉄製品・銭貨等がある。以下その概要について述べる。

瓦

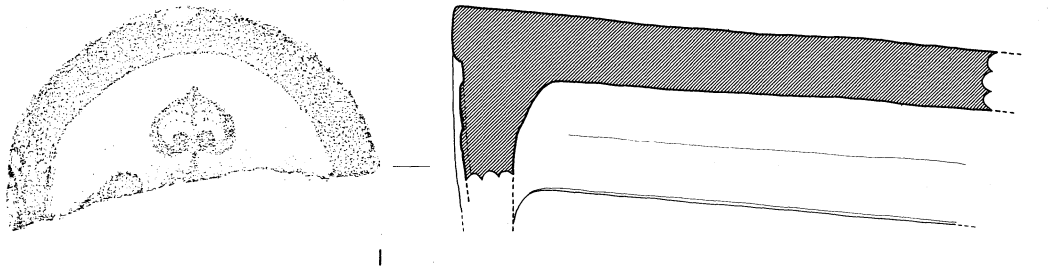
本丸内の建物に使用されていたと考えられるものであり、本丸北側土塁前の瓦溜め、天守台トレンチ内、本丸西側部分の整地層と考えられる所から多量に出土しており、その種類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鬼瓦・鯱瓦等がある。

軒丸瓦（第８図１～３、第９図７～12）　今回出土した軒丸瓦にはいわゆる菊丸瓦も含めて９種類みられる。１は瓦当の直径 14.7 ㎝、内区には横須賀城第12代城主である本多利長の紋所である『立葵』が文様としてつけられている。２は瓦当の直径14.7 ㎝、内区には13代から明治維新の廃城時までの城主であった西尾氏の紋所である『櫛松』が文様としてつけられている。３は瓦当の直径16.0 ㎝、内区には巴文がつけられている。

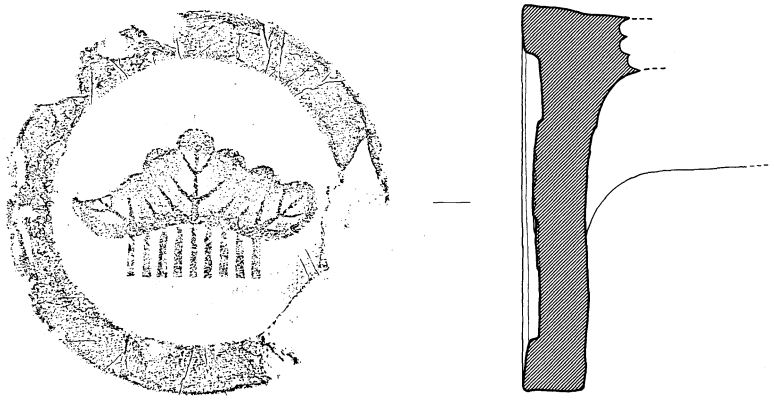
７～12は棟部分の装飾に使用されたと考えられるいわゆる菊丸瓦である。７は瓦当の直径 7.5 ㎝、内区には菊の文様ではなく、本多氏の紋所『立葵』がつけられている。８、９、10は瓦当の直径８～8.5 ㎝のいずれも内区には、陽刻の菊の文様がつけられているが、８は弁に沈線をもち16弁、９は16弁、10は15弁となっている。また11、12はいずれも瓦当の直径 8.5 ㎝程の陰刻の菊丸瓦であり、11は８弁、12は16弁となっている。

軒平瓦（第９図５、６）　今回２種類出土している。いずれも唐草文をつけているが、中央にはそれぞれ、『立葵』『櫛松』の文様がつけられている。５は軒丸瓦の１と、６は同じく２とセットとして作られ、使用されたものであろう。

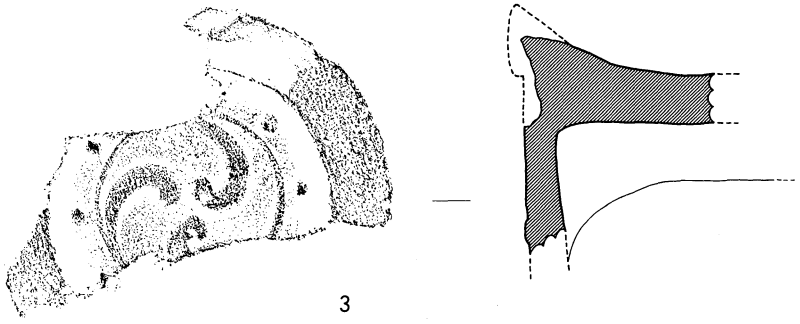
鯱瓦（第10図14）　14は鯱瓦の一部と考えられるものである。表面には形を押しあてて鱗を表現している部分もみられる。内面には輪積みの痕跡が顕著である。全体のどの部分にあたるのかははっきりせず、今後の検討を要する。



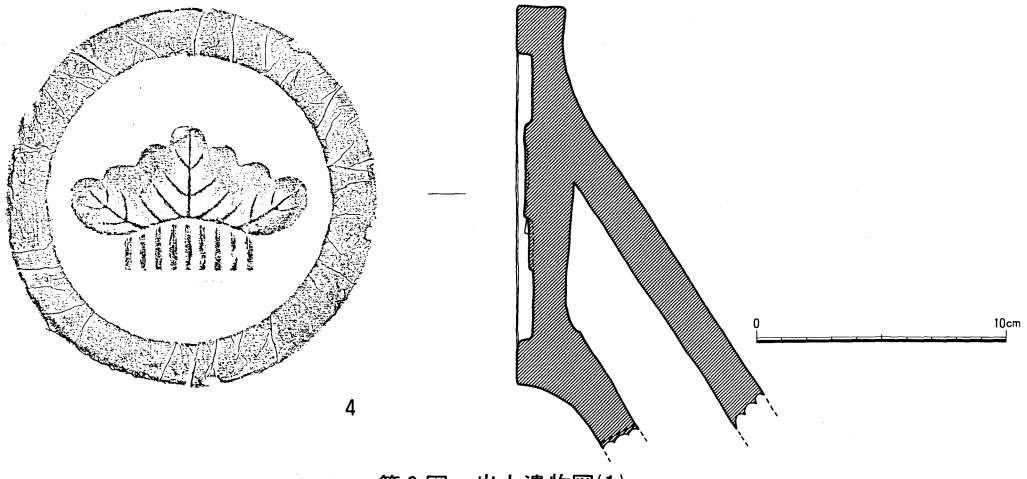
1



2

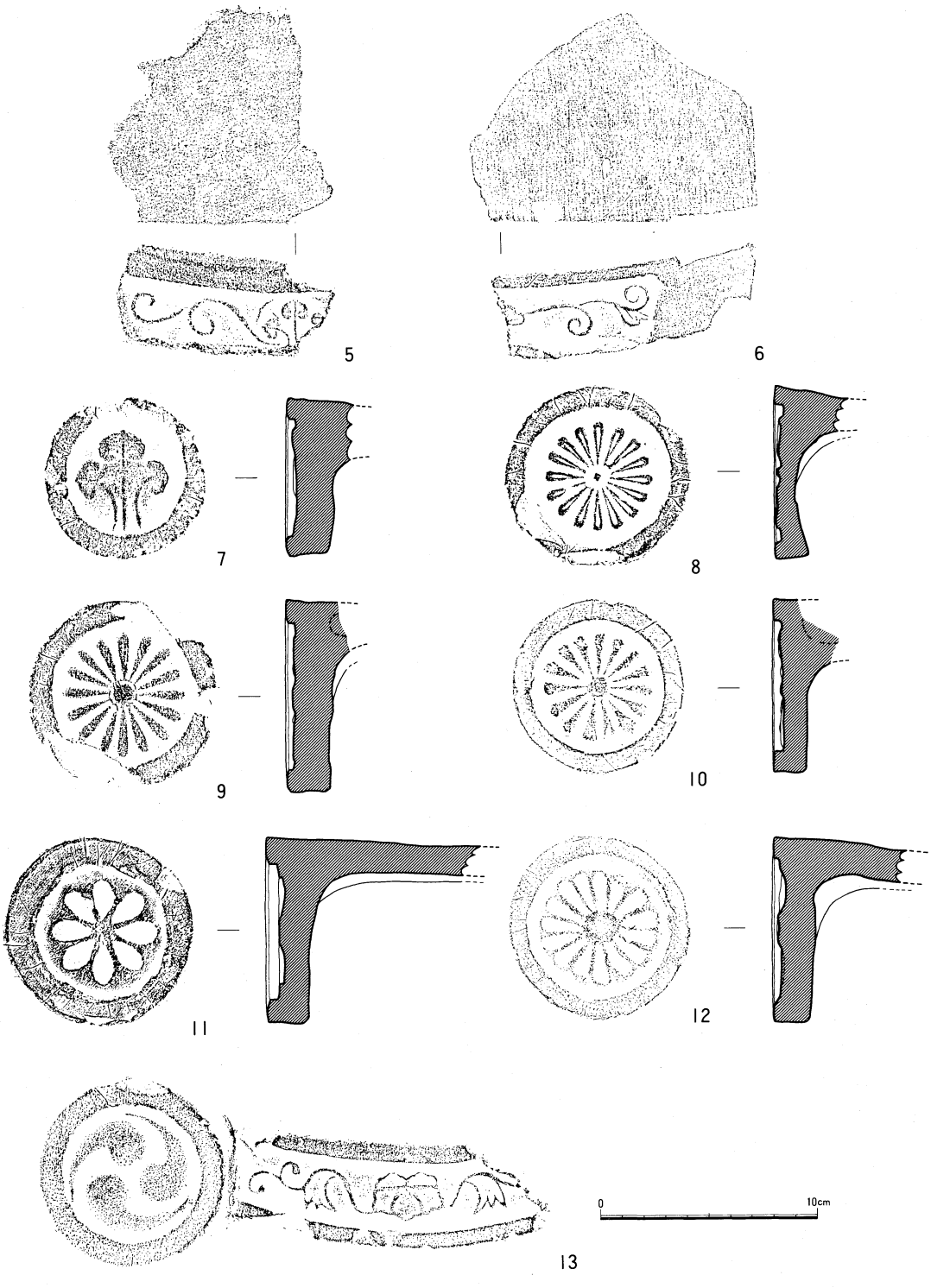


3

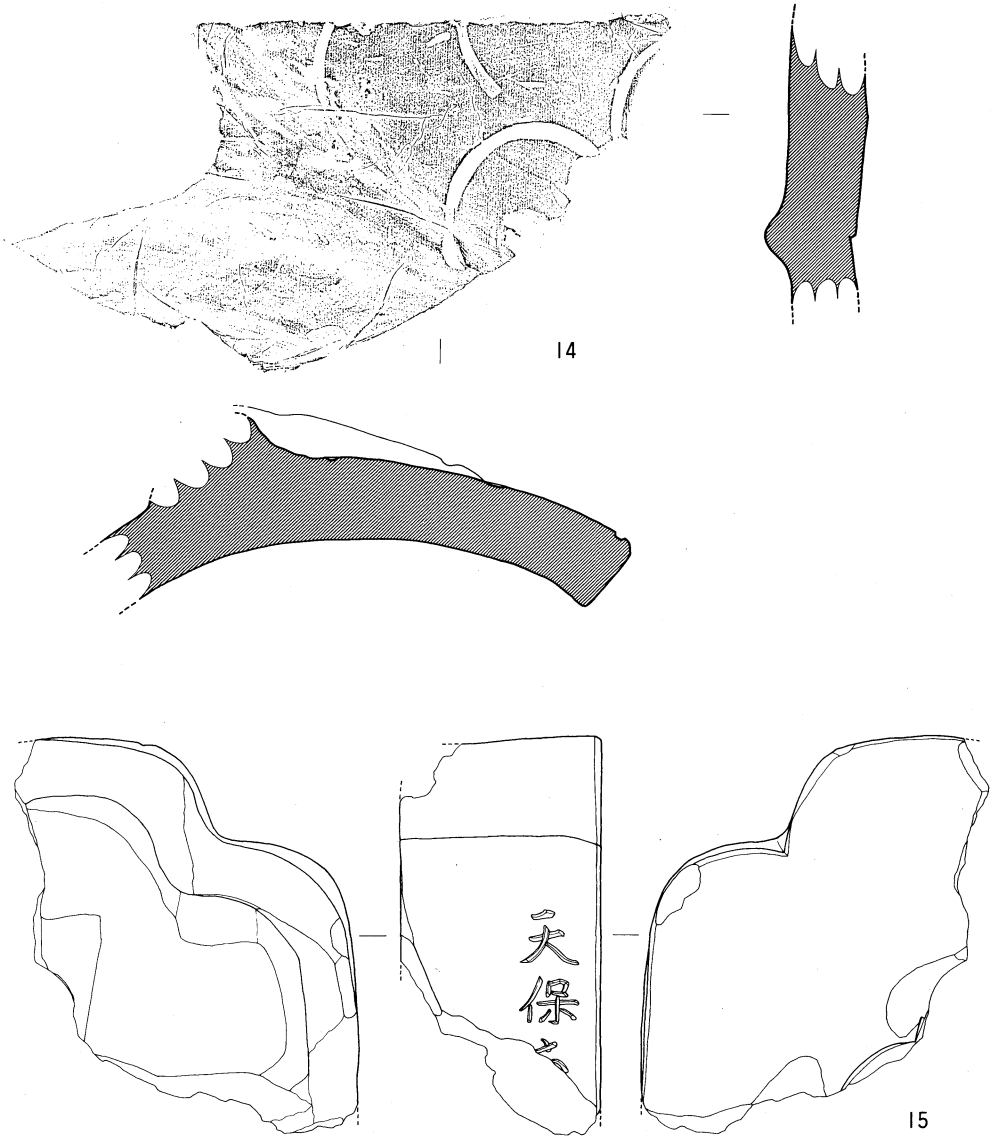


4

第8図　出土遺物図(1)



第9図　出土遺物図(2)



第10図　出土遺物図(3)

鬼瓦（第10図15）　鬼瓦の左上隅の部分と考えられるものである。その左側面にはヘラ書きで「天保六」と刻まれており、瓦の製作年代がはっきりとわかるものである。

他に、鳥衾かと考えられる『 槲松 』の文様のもの（４）がある。また、巴文の桟瓦の軒瓦(13)も出土している。その他の多くは、平瓦・丸瓦・熨斗瓦等であり、本丸北側の土塁前の瓦溜めでは瓦とともにしっくいも出土している。

陶磁器

本丸西側調査区の耕作土中から多量に出土している。その多くは明治以降と考えられるものであり、廃城後茶畑となったこの場所に棄てられたものであろう。しかし、それらに混じって、江戸時代後期のものも何点かみられる。18～19世紀代の美濃・瀬戸製の本業焼、伊万里焼、志戸呂焼等がみられ、中には17世紀頃のものと考えられる唐津焼も１点みられる。ほとんどが破片であり、形がわかるものは少ないが、すり鉢、そば猪口、蓋等がある。いずれも日常雑器の類と考えられる。

鉄製品

陶磁器と同じく、本丸西側部分の調査区から、釘等の鉄製品が出土している。釘は断面が方形のものであり、この本丸部分の建物に使用されたものと考えられる。

銭貨（第10図16～19）

本丸西側部分の調査区から出土している。16はその細かい特徴からみて、明治元（1968）年から２（1869）年に鋳造された明治二分判金と呼ばれるものと考えられる。17は裏面の文様からみて、正字（11波）と呼ばれる寛永通宝の四文銭であり、明和６（1769）年に鋳造されたものと考えられる。18は草文の文久永宝の四文銭であり、文久３（1863）年に鋳造されたものと考えられる。19は腐蝕のため判然とはしないが、寛永通宝と考えられる。

※陶磁器については(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の足立順司氏にご教示をうけた。

第Ⅲ章　ま　と　め

史跡横須賀城跡の保存は昭和57年度、58年度に「保存管理計画」が策定され、その方向付けがなされ、本年度から保存修理事業が開始された。本年度に行なわれた事業には測量基準点の設置と地形測量、整備委員会の設立、本丸部分の発掘調査、松尾山の伐開があり、他に町の単独事業として「整備基本計画」の作成がある。

こうした中で特に本丸部分の発掘調査の成果と今後の課題についてまとめてみたい。

本丸部分の発掘調査は、本丸の西側部分、土塁、天守台の一部を対象として行なわれた。その結果、

1. 本丸西側部分については何らかの遺構も検出されず、本丸と西の丸の通路的性格をもつ空間ではないかと考えられた。
2. 本丸北側の土塁については2時期の構築が確認された。
3. 天守台についてはかなり後世の改変をうけていることが認められ、今回調査された部分では、本丸の建物の基礎と考えられる集石が検出された。
4. 土塁前に瓦溜めが検出され、本丸部分の建物に使用されたと考えられる瓦の豊富な種類が認められた。

こうした結果とともに、今後の調査の課題も多く、天守台の位置および規模の確認、本丸内の建物の確認、本丸への登り口の確認、土塁の構築時期の解明等がある。調査については今後も継続され、これらの課題の解明がなされるとともに、復元整備の大きな基礎資料を提供することとなろう。

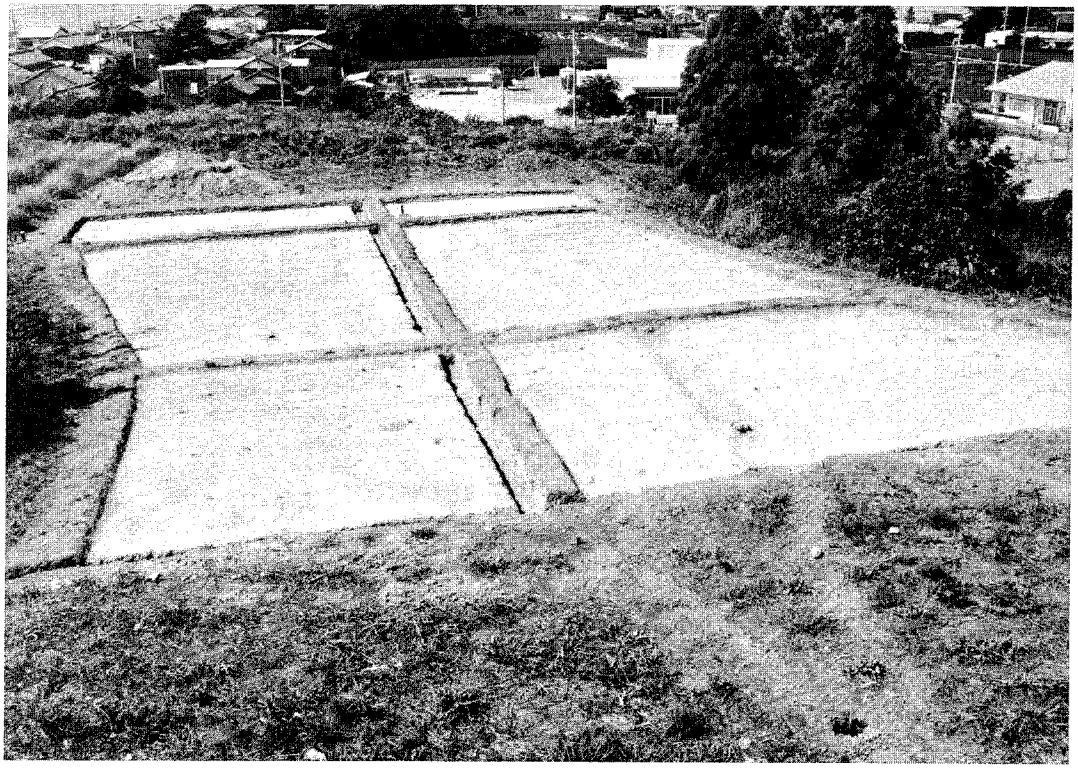
図　　版

図版 1

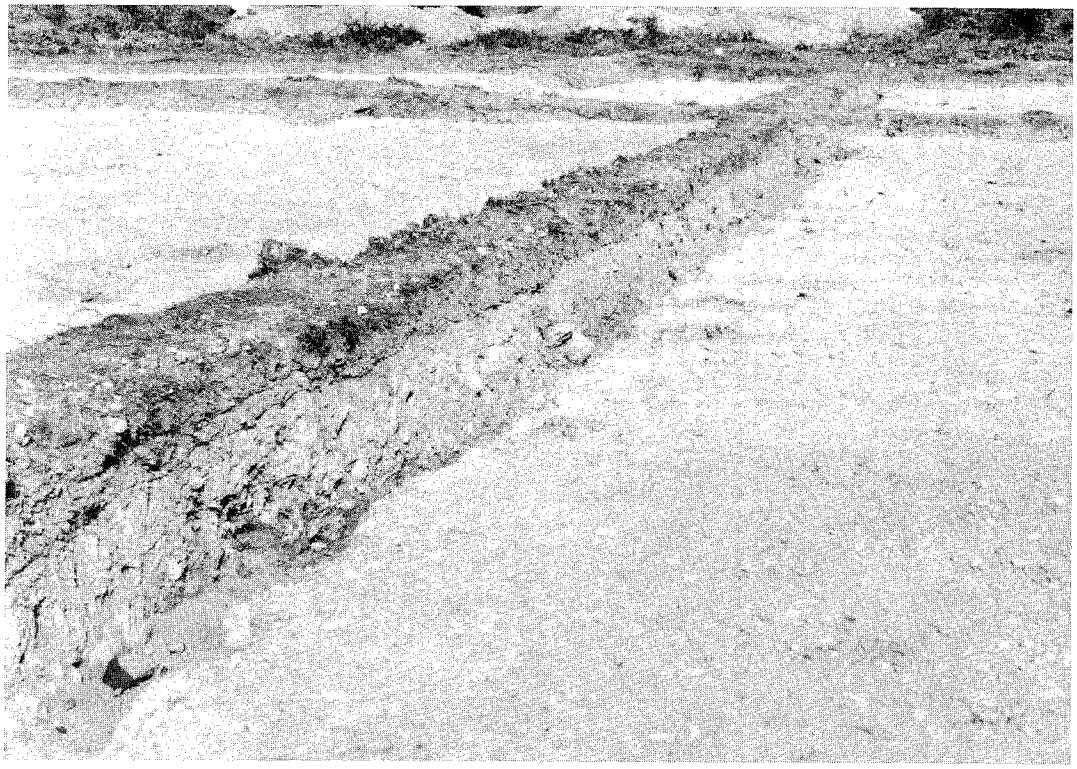
1．横須賀城跡遠景（南より）

2．本丸部分調査前風景（東より）

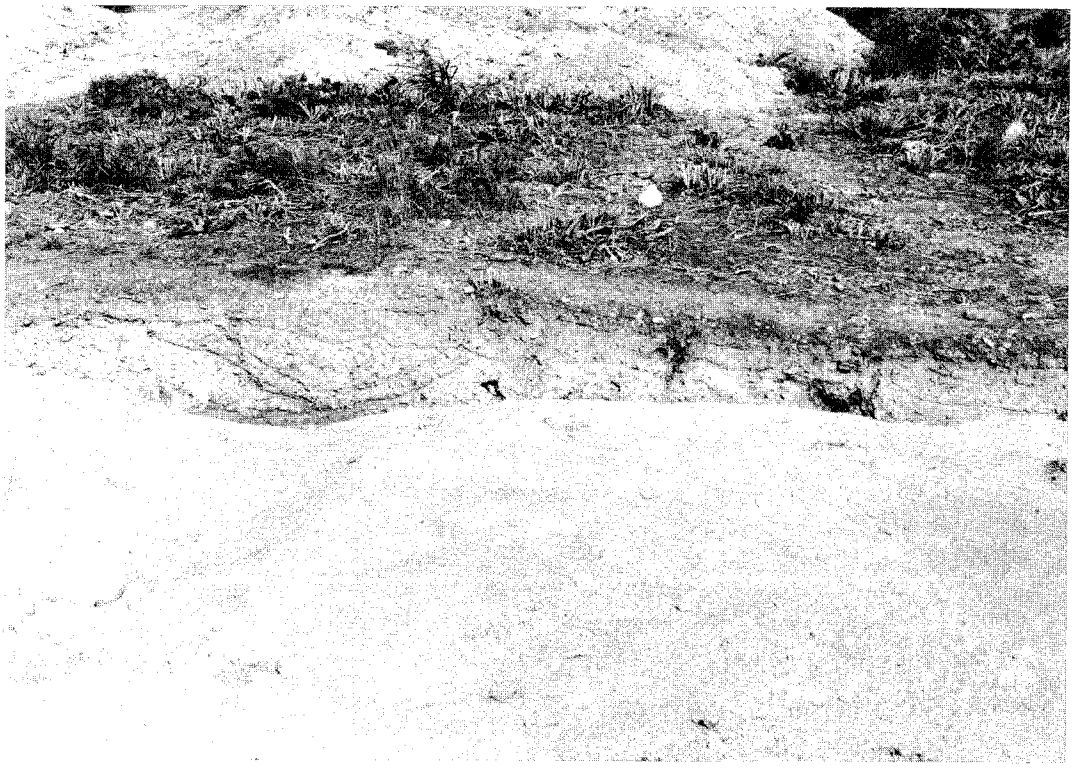
図版2



1．本丸西側部分発掘区全景

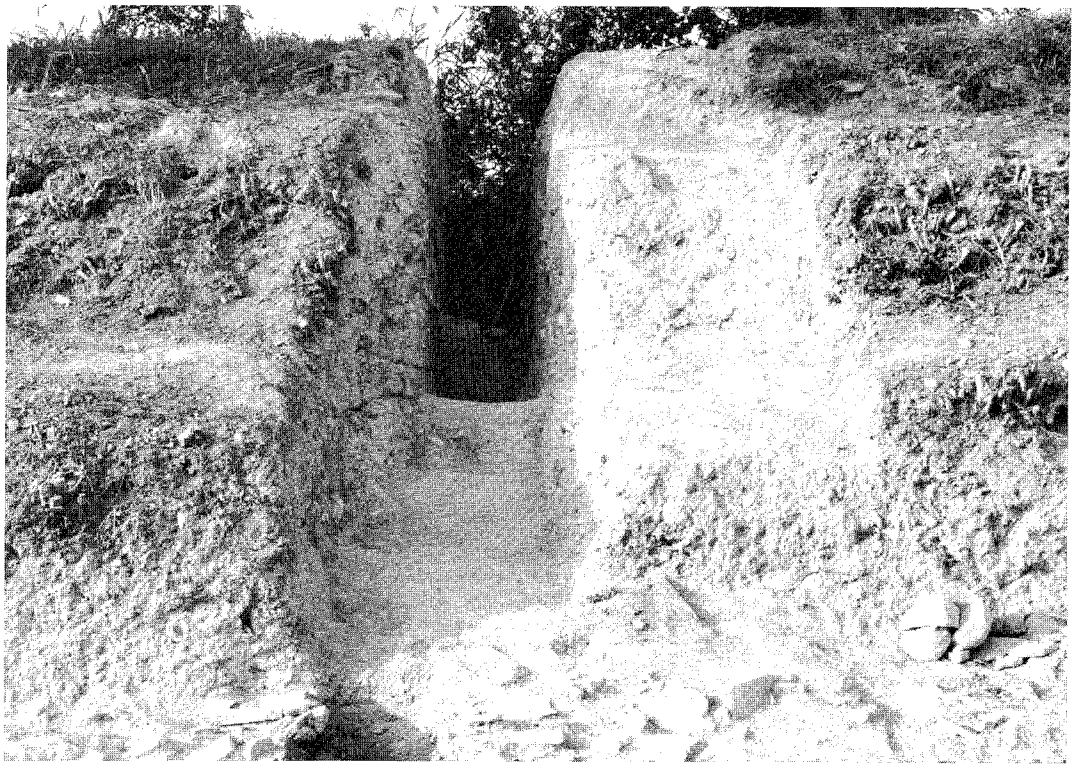


2．本丸西側部分土層堆積状況(1)



1．本丸西側部分土層堆積状況(2)

2．本丸西側部分サブトレンチ瓦出土状況



1．本丸北側土塁トレンチ

2．本丸北側土塁断面

1．本丸北側土塁前瓦溜め全景

2．同瓦堆積状況

1．本丸北側土塁前瓦溜め(部分)(1)

2．本丸北側土塁前瓦溜め(部分)(2)

3．天守台トレンチ瓦溜め

1．天守台トレンチ

2．天守台トレンチ内集石

図版 8

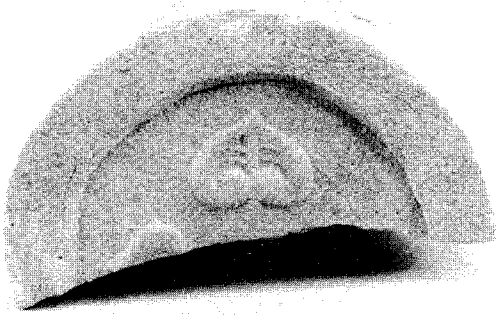
1．作業風景（調査区下草刈り）

2．作業風景（トレンチ掘り下げ）

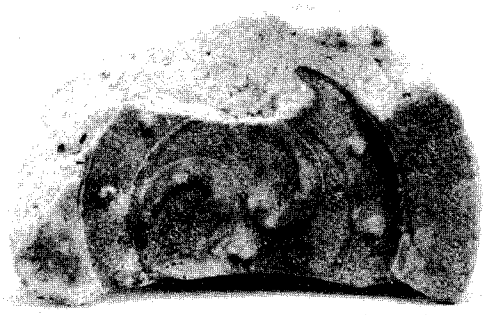
3．作業風景（瓦溜精査）

出土遺物(1)

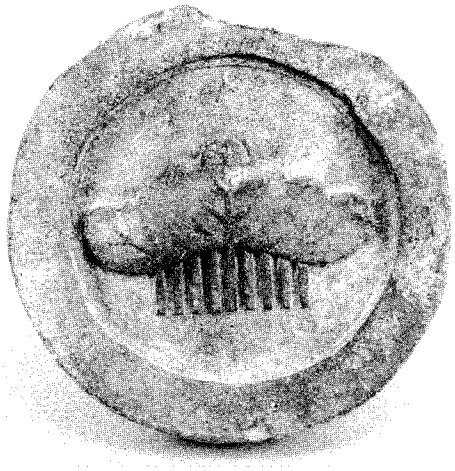
図版9



1



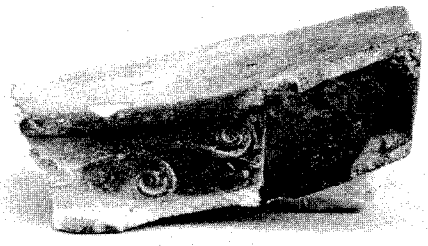
3



2

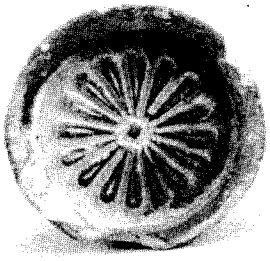
4

5



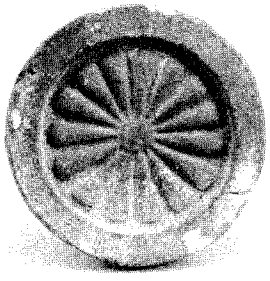
6

7

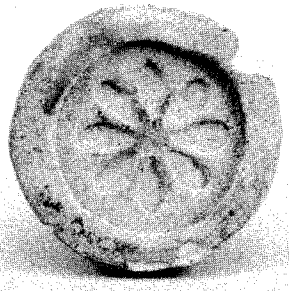


8

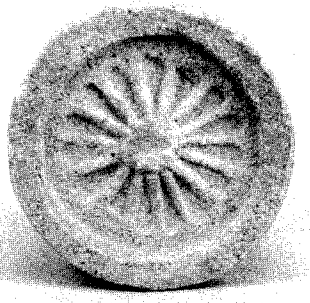
9



10



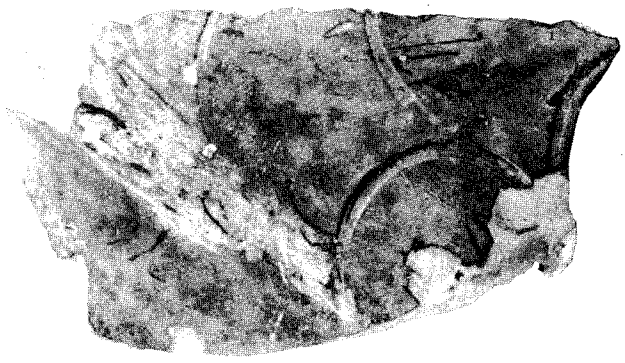
11



12

出土遺物(4)

図版11

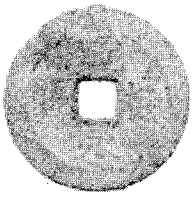


14

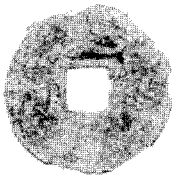
15

図版12

16

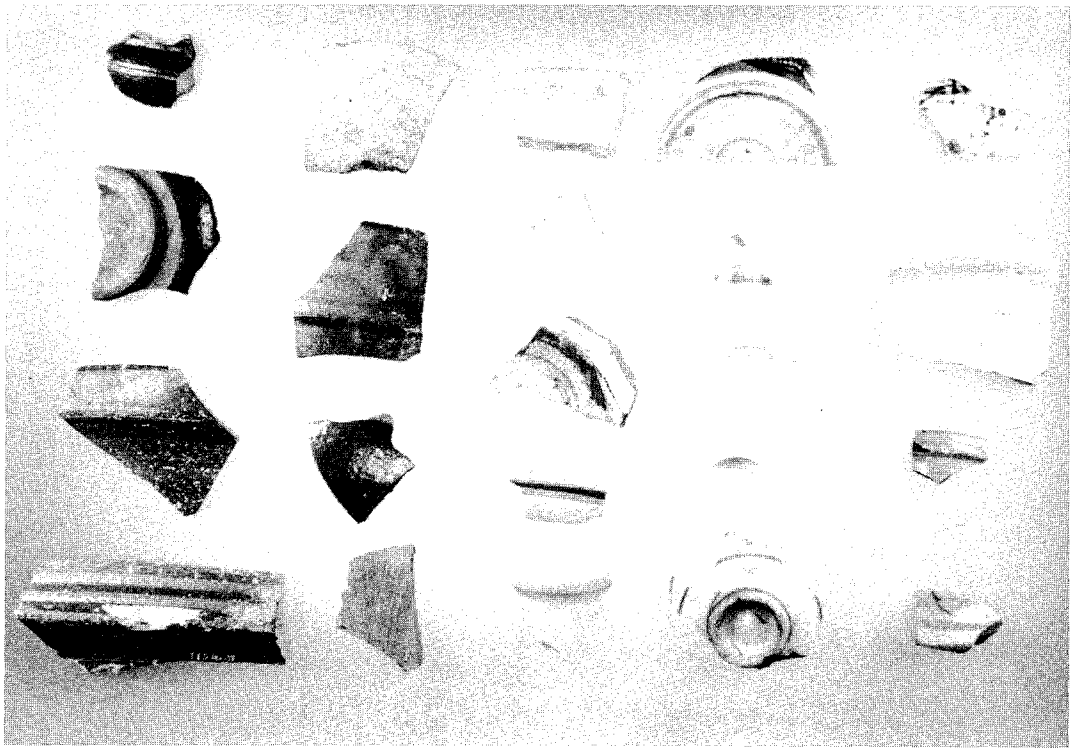


17



18

19



陶磁器

史跡横須賀城跡 I

昭和60年3月30日

編集
発行　大須賀町教育委員会

印刷所　株式会社　三　　創
静岡市豊田3丁目5番30号
電話（0542）82－4031㈹